

# 1 栄養・食生活(案)(H.23.8.12版)

## 〈指標の達成状況〉

A. 改善した	1. 目標値に達した	10	1
	2. 目標値に達していない		9
B. 変わらない		3	
C. 悪くなっている		2	

※各指標の達成状況については、別添シート参照

## 〈総括評価〉

- 栄養状態、栄養素・食物摂取については、児童・生徒及び40～60歳代女性の肥満、食塩摂取量には改善がみられたが、脂肪エネルギー比率や野菜の摂取量などについては改善がみられなかった。
- 知識・態度・行動の変容については、自分の適正体重を維持することのできる食事量を理解している人の割合、メタボリックシンドロームを認知している割合など知識や態度レベルでは改善がみられたが、朝食欠食や野菜の摂取については行動レベルの変容にまで至らなかった。
- 行動変容のための環境づくりについては、ヘルシーメニューの提供や学習・活動への参加について改善が見られた。

## 〈指標に関連した施策〉

- 食生活指針の作成、普及啓発
- 「食事バランスガイド」の作成、普及啓発
- 食育の推進(食育基本法施行、食育基本計画の策定)
- 特定健診・特定保健指導
- 栄養成分表示の推進

## 〈今後の課題〉

- 肥満の予防・改善については運動との連動、朝食欠食の改善については休養(生活リズム)との連動などといった、個々人の生活習慣全体を包括的に捉えた新たなアプローチとともに、子どもの頃からの望ましい生活習慣の定着を強化していくことが必要。
- 食塩摂取量の減少のように、個々人の努力では、これ以上の改善が困難なものについては、栄養成分表示の義務化や市販食品の減塩など企業努力を促すための環境介入が必要。
- 今後は、地域格差や経済格差の影響が大きくなることも想定されるので、社会環境要因に着目した戦略が必要。

## **健康日本21の目標値に対する直近値に係るデータ評価シート(案)** **(H.23.8.12版)**

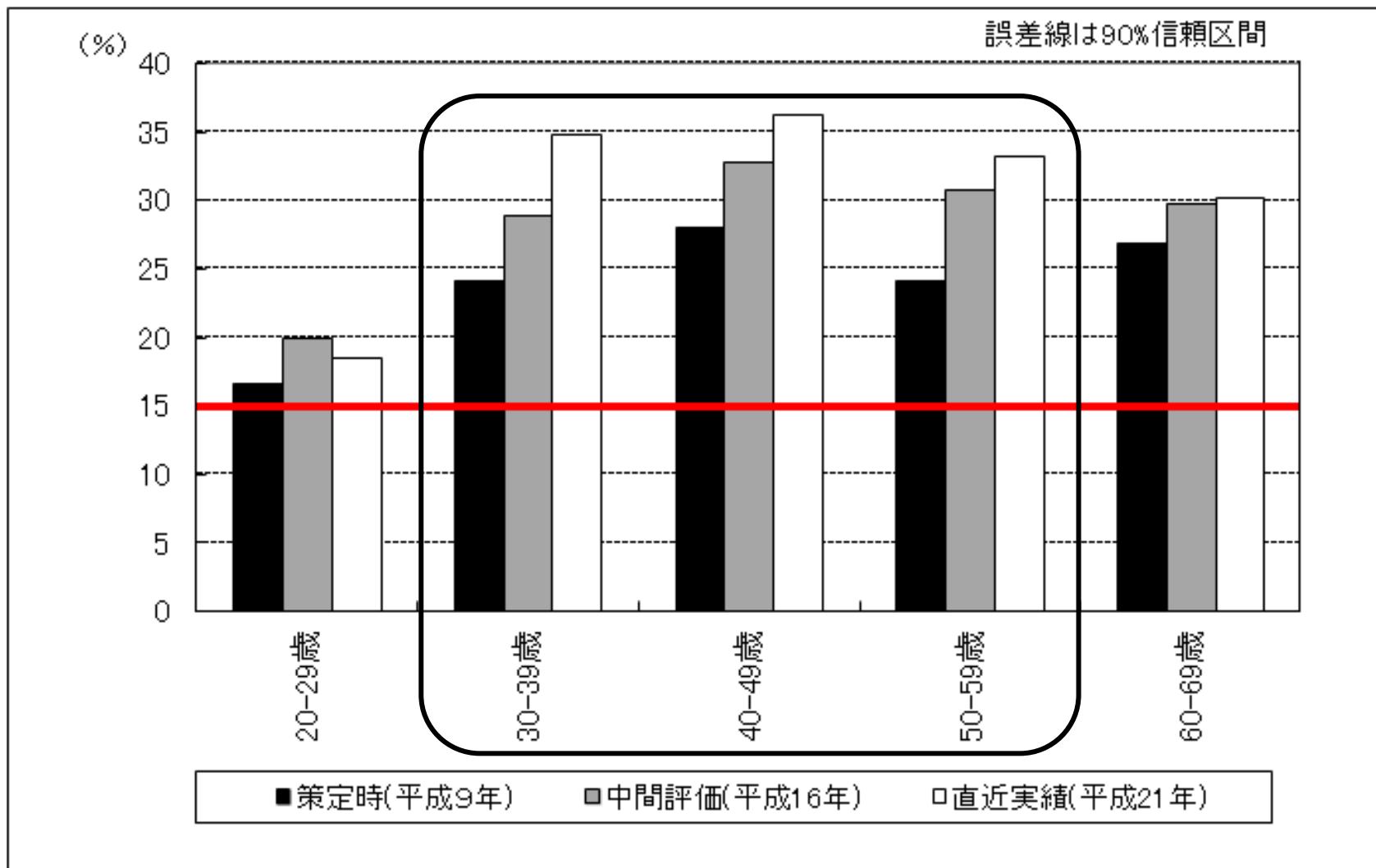
### **栄養・食生活 分野**

記載留意事項…各項目の冒頭には、見出しとして分析結果、課題等を要約として記載してください。  
詳細なデータ解析をした場合は、解析結果や二次資料を添付してください。

---

分野:栄養・食生活			
目標項目:1.1 適正体重を維持している人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
児童・生徒の肥満児の減少 (6~14歳男女:日比式標準体重を基準として20%以上 7%以下)	10.7%	10.2%	9.2%
20歳代女性のやせの者の減少(BMI<18.5) 15%以下	23.3%	21.4%	22.3%
20~60歳代男性の肥満者(BMI≥25.0) 15%以下	24.3%	29.0%	31.7%
40~60歳代女性の肥満者(BMI≥25.0) 20%以下	25.2%	24.6%	21.8%
コメント			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析		
	○児童・生徒の肥満児の割合は減少		
	○20歳代女性のやせの割合はほぼ横ばい		
	○20~60歳代男性の肥満者の割合は増加		
	○40~60歳代女性の肥満者の割合は減少		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○肥満の割合は、児童・生徒並びに40~60歳代女性では、目標に向けて改善した。 ○20~60歳代男性では、目標に対して悪化したが、肥満者の割合の増加傾向は平成12年以降では、それ以前の5年間に比べ鈍化している。 ○20歳代女性のやせの割合は、変わらない。		A-2
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○肥満者の割合について、性・年齢階級別にみると、有意に増加しているのは、30~50歳代男性で(図1)、特に、平成21年の肥満者の割合を、10年前の該当世代と比較すると、現在の30歳代男性の増加割合が最も大きいため、20歳代から30歳代にかけて体重を増やさないためのアプローチが必要である(図2)。 ○都道府県別の肥満者の割合をみると、地域格差がみられるため、地域格差に配慮した取組が必要である(図3)。		
(5)その他コメント			

# 図 1 肥満者の割合（男性、年齢階級別）



## 図2 肥満者の割合（横断的变化）

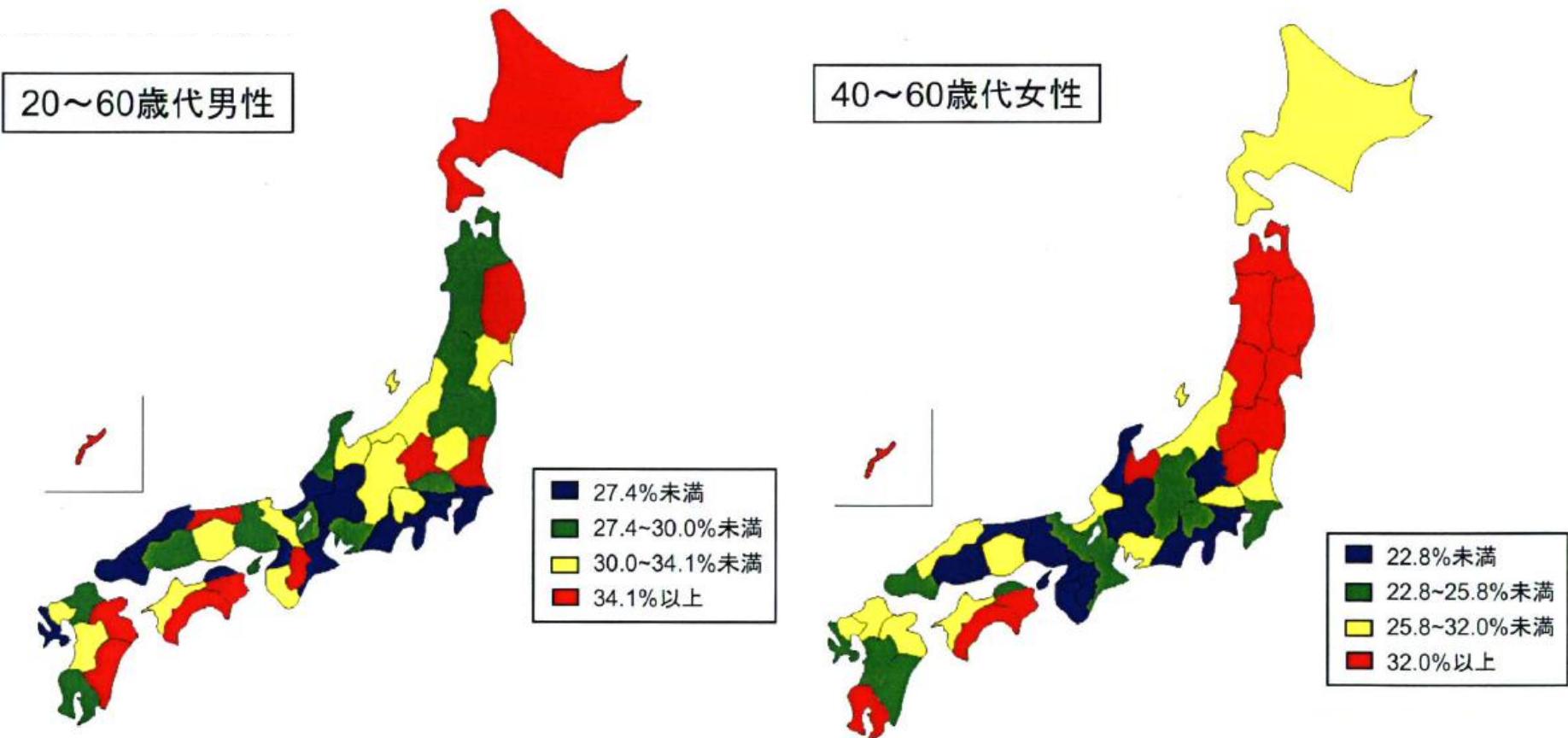
<男性>

平成21年国民健康・栄養調査	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
	18.5%	34.8%	36.2%	33.3%	30.2%
		↑ (15.6)	↑ (6.2)	↑ (1.9)	↑ (0.6)
平成11年国民栄養調査	—	19.2%	30.0%	31.4%	29.6%
	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代

<女性>

平成21年国民健康・栄養調査	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
	7.2%	14.7%	20.0%	19.3%	24.9%
		↑ (7.4)	↑ (6.7)	↑ (0.5)	↑ (-2.6)
平成11年国民栄養調査	—	7.3%	13.3%	18.8%	27.5%
	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代

## 図3 肥満者の割合（都道府県別）



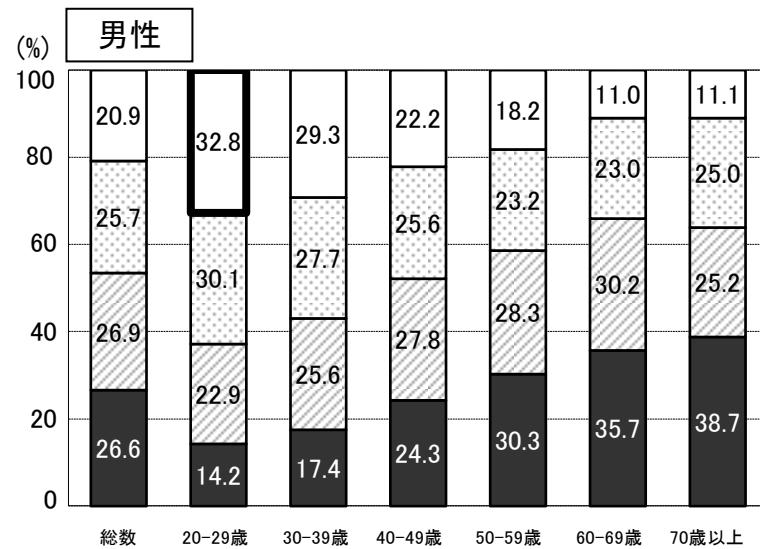
資料:平成19年度厚生労働科学研究

「都道府県等の生活習慣病リスク因子の格差及び経年モニタリング手法に関する検討(主任研究者 吉池信男)  
～国民健康・栄養調査を活用した健康及び栄養水準に係る都道府県別ベンチマーク指標の検討～」

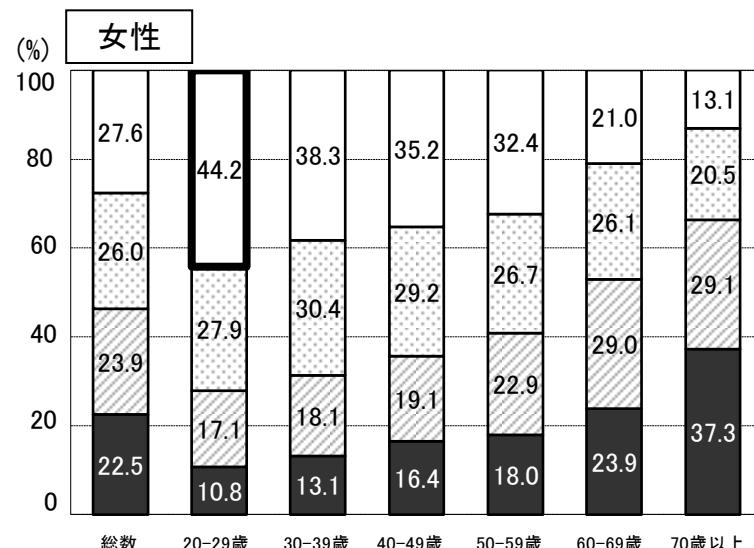
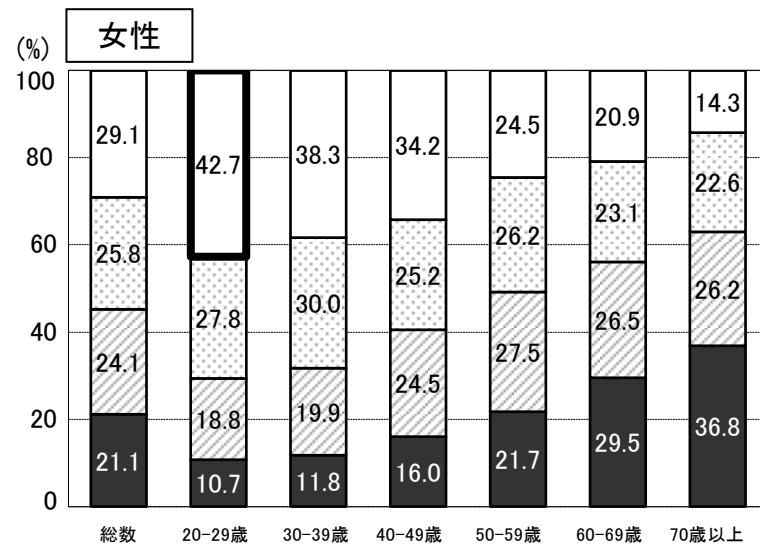
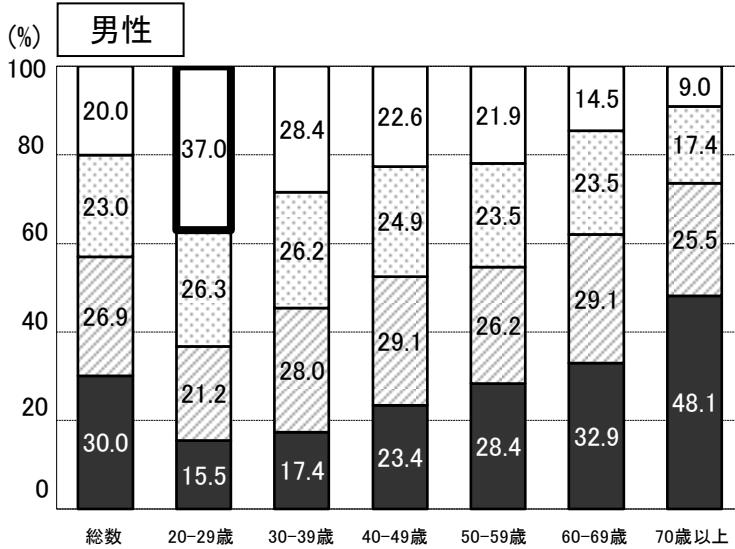
分野:栄養・食生活					
目標項目:1.2 脂肪エネルギー比率減少					
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)		
20～40歳代 25%以下	27.1%/日	26.7%/日	27.1%/日		
	コメント				
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○横ばいである。</p>				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○変わらない。	B			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	<p>○脂肪エネルギー比率が30%以上の者の割合は、男女とも20歳代で最も高く(図4)、この世代へのアプローチが必要である。</p>				
(5)その他コメント	<p>○男性より女性で高い。            ○男女とも20～40歳代ではいずれの年代でも横ばい。            ○直近値の20～40歳代では、男女とも20歳代で最も高く、男性で27.6%、女性で29.1%。            ○脂肪の供給食品は、肉類とドレッシング等の油脂、調味料で約5割を占め、この10年間で変化はない。</p>				

# 図4 脂肪エネルギー比率の状況

<策定期(平成9年)>



<直近実績(平成21年)>



- 30%以上
- 25-30%
- 20-25%
- 20%未満

分野:栄養・食生活					
目標項目:1.3 食塩摂取量減少					
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)		
成人 10g/日未満	13.5g/日	11.2g/日	10.7g/日		
			コメント		
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○減少している。</p>				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。	A-2			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	<p>○これ以上の減少については、個々人の努力だけでは限界があることから、食事内容や量の調整ができるよう栄養成分表示の義務化や、食品に含まれる食塩含有量を減らすための企業努力を促す環境介入も必要である。</p>				
(5)その他コメント	<p>○男性より女性で低く、女性では9.9g/日まで減少。      ○男女ともいずれの年代でも減少している。      ○直近値では、男女とも60歳代で最も高く、男性で12.4g、女性で10.5gである。      ○食塩の供給源は調味料が約7割を占め、この10年間で変化はない。</p>				

分野:栄養・食生活			
目標項目:1. 4 野菜摂取量の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人 350g以上	292g/日	267g/日	295g/日
			コメント
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○横ばいである。</p>		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○変わらない。		B
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	<p>○毎日野菜料理をたっぷり(1日小鉢5皿、350g程度)食べることについて「するつもりはあるが、自信がない」と回答した人の割合は29.0%、「するつもりがない」は6.1%(平成21年国民健康・栄養調査結果)であり、対象者の状況に合わせた支援が必要である。</p>		
(5)その他コメント	<p>○直近値では、20歳代で最も低く、242gである。</p>		

分野:栄養・食生活					
目標項目:1.5 カルシウムに富む食品の摂取量の増加(成人)					
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)		
牛乳・乳製品 130g以上	107g/日	101g/日	91g/日		
豆類 100g以上	76g/日	65g/日	59g/日		
緑黄色野菜 120g以上	98g/日	89g/日	99g/日		
コメント					
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析				
	○牛乳・乳製品、豆類については減少。緑黄食野菜については横ばいである。				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○牛乳・乳製品、豆類は、悪くなっている。 ○緑黄食野菜は、変わらない。	C			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載					
(5)その他コメント	○直近値の豆類及び緑黄食野菜では、どちらも20歳代で最も低く、豆類は45g、緑黄色野菜は71gである。牛乳・乳製品は、40歳代で最も低く、83gである。				

分野:栄養・食生活					
目標項目:1. 6 自分の適正体重を認識し、体重コントロールを実践する人の増加					
目標値	策定時のベースライン値 (H10年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)		
男性(15歳以上) 90%以上	62. 6%	60. 2%	67. 7%		
女性(15歳以上) 90%以上	80. 1%	70. 3%	76. 3%		
		コメント			
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○男性では増加、女性では中間評価時に減少がみられたものの、最終評価の値はほぼ横ばいまで回復している。</p>				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○男性は、目標に向けて改善したが、目標値には達していない。 ○女性は、変わらない。	A-2			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載					
(5)その他コメント	<p>○体重コントロールを実践する人の割合が低い年代は、(成人では)ベースライン値、直近値の男女とも20歳代である(ベースライン値:男性50.7%、女性72.7%、直近値:男性53.5%、女性68.6%)。</p>				

分野:栄養・食生活			
目標項目:1.7 朝食を欠食する人の減少			
目標値	策定時のベースライン値 (H9年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
中学・高校生 0%	6. 0%	6. 2%	7. 2%
男性(20歳代) 15%以下	32. 9%	34. 3%	33. 0%
男性(30歳代) 15%以下	20. 5%	25. 9%	29. 2%
	コメント		
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○中学・高校生は増加。</li> <li>○20歳代男性では横ばい、30歳代男性では増加。</li> </ul>		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○欠食の定義について、策定時は「食事をしなかった場合」であるが、中間評価・直近の実績値は「食事をしなかった場合」及び「菓子、果物、乳製品、し好飲料などの食品のみ食べた場合」、「錠剤・カプセル・顆粒状のビタミン・ミネラル、栄養ドリンク剤のみの場合」の合計であるため、比較には注意を要する。</li> </ul>		
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○20歳代男性では、変わらない。</li> <li>○中学・高校生及び30歳代男性では、悪くなっている。</li> </ul>		
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	<ul style="list-style-type: none"> <li>○習慣的に朝食を欠食している20歳以上で、朝食を食べない習慣が「小学校の頃から」又は「中学、高校生の頃から」と回答した人の割合は、男性で32.7%、女性で25.2%(図5)であることから、子どもの頃から正しい食習慣を身につける取組が重要である。</li> <li>○習慣的に朝食を欠食している人で、朝食を食べるため必要な支援は、男女とも「早く寝る、よく眠る」が最も多く、男性は女性に比べ、「家族や周りの人の支援」、「残業時間の短縮など労働環境の改善」が高い。朝食を食べている人が食べ続けるための支援では、男性は「家族や周りの人の支援」、女性は「自分で朝食を用意する努力」が最も多い(図6-1,6-2)など、朝食を食べている人と食べていない人、男性と女性で、支援内容が異なることから、社会環境な要因も踏まえて対象にあった支援が必要である。</li> <li>○直近値の欠食の内訳をみると、「何も食べない」は20歳代で19.9%、30歳代で17.0%、「菓子、果物、乳製品、嗜好飲料などの食品を食べた」は20歳代で12.8%、30歳代で11.8%であり、主食をきちんととるなど食事内容を見直し、バランスのとれた内容に改善するための支援も必要である(図7)。</li> </ul>		
(5)その他コメント			

# 図5 朝食欠食が始まった時期（20歳以上）

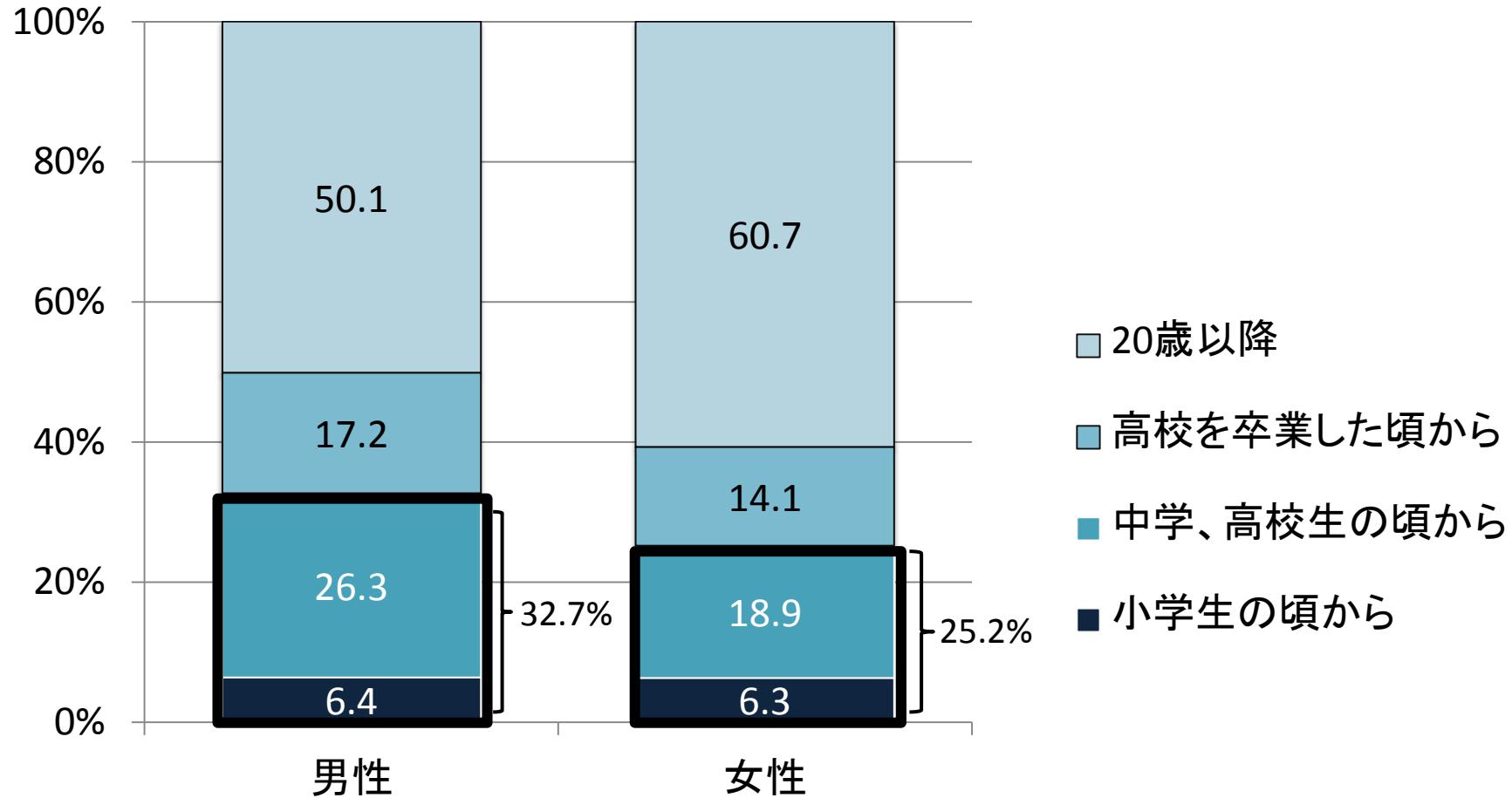


図6-1 習慣的に朝食を欠食している者における、朝食を食べるためには必要な支援内容（20歳以上）

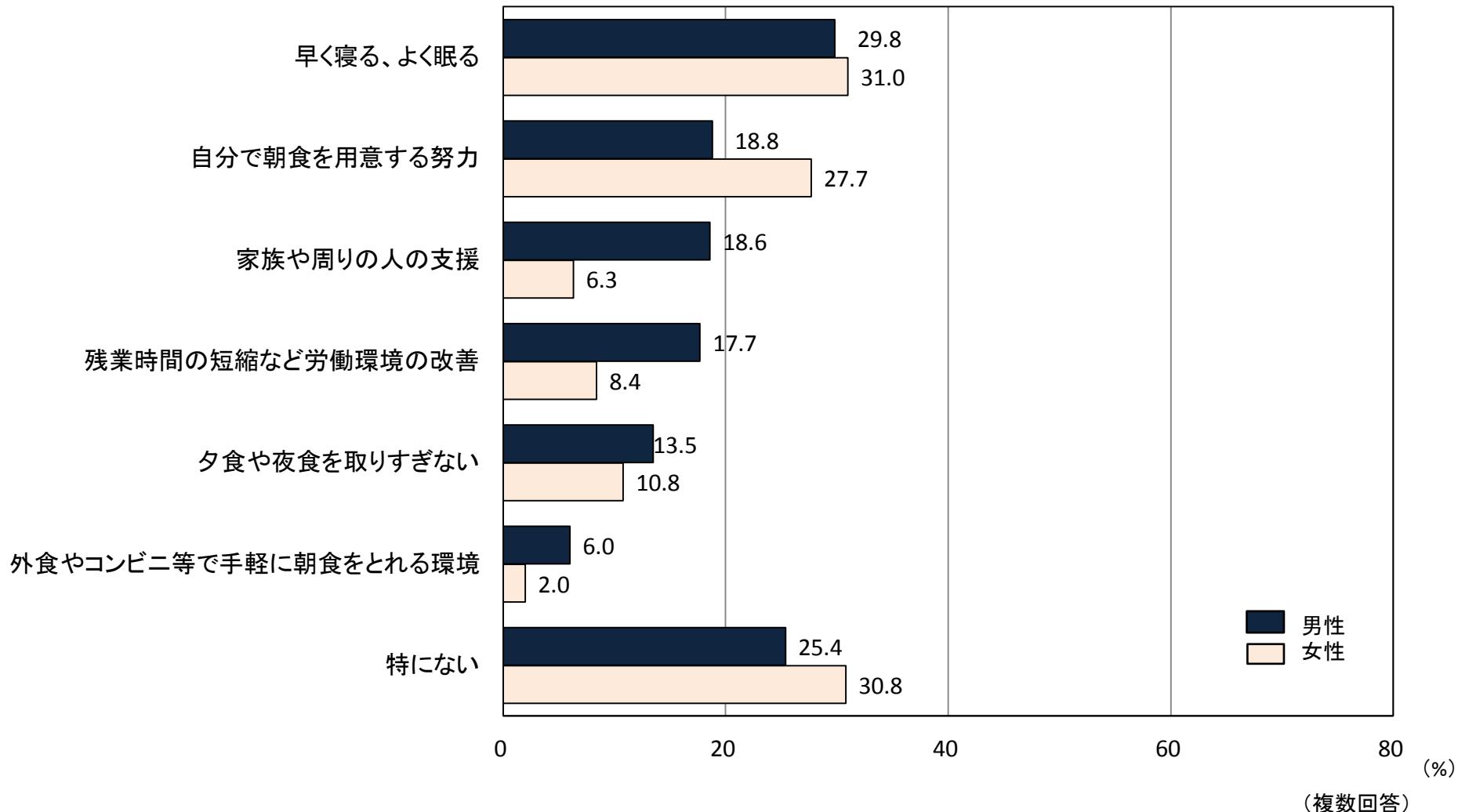
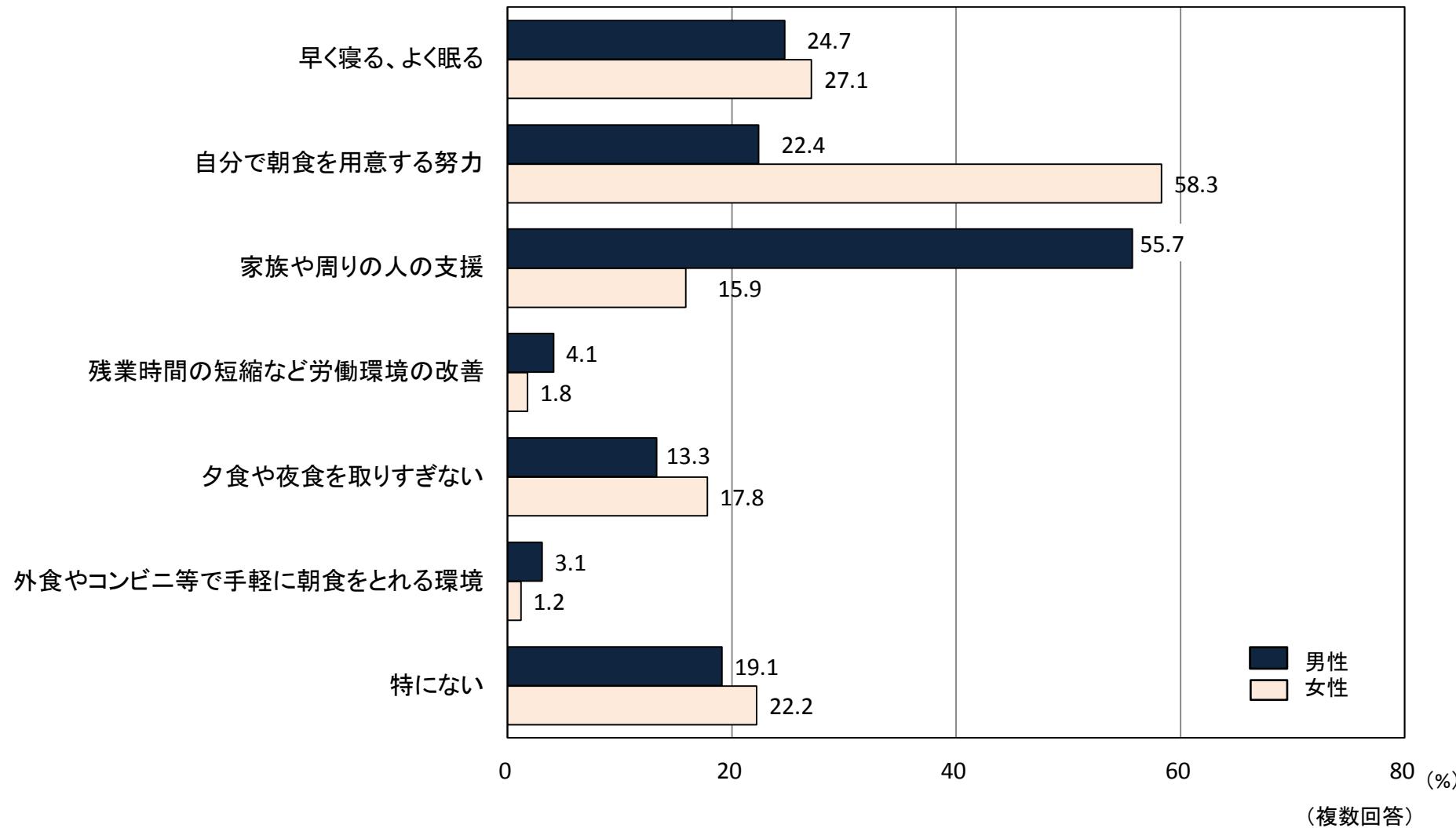
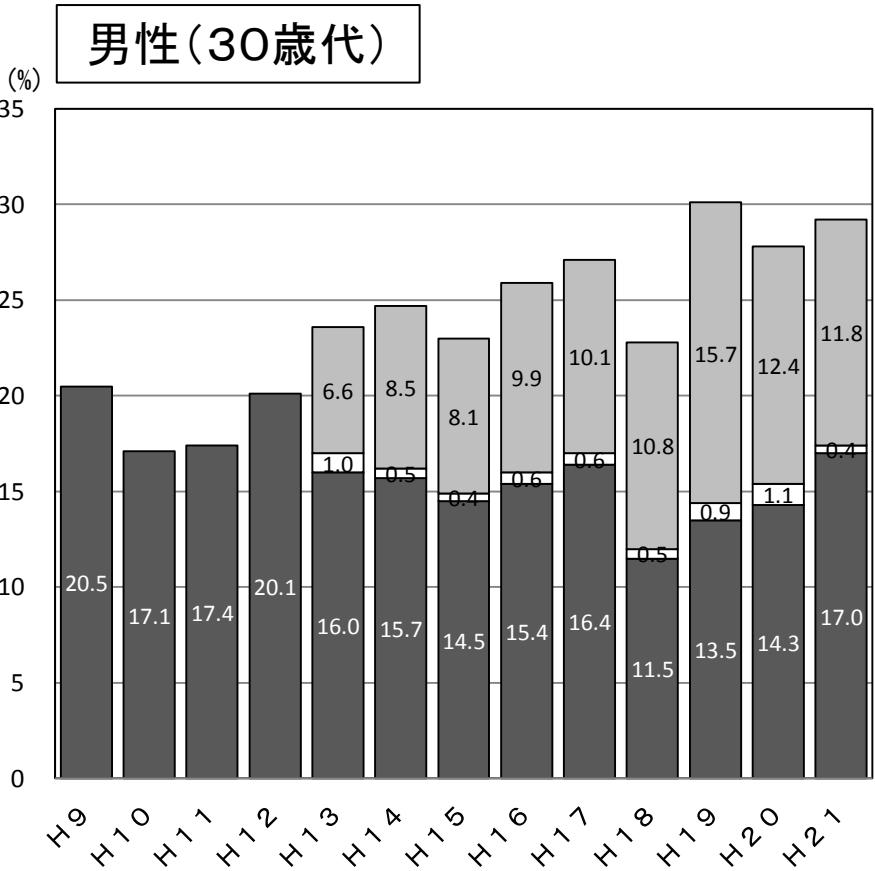
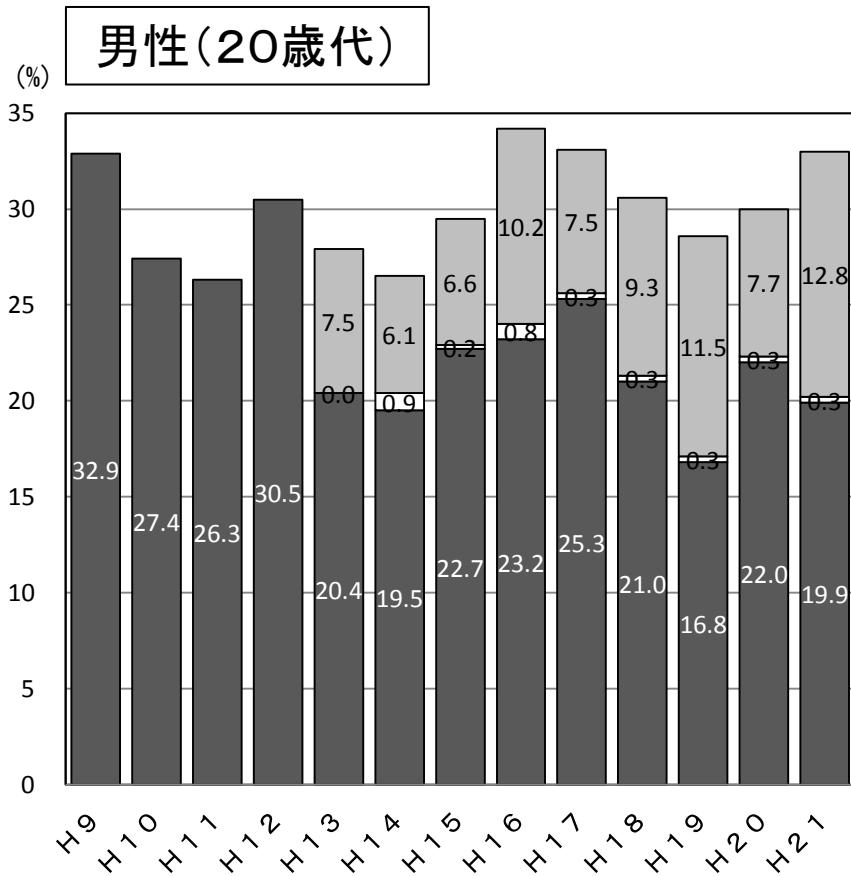


図6-2 朝食をほとんど毎日食べている者における、朝食を今までどおり食べるためには必要な支援内容（20歳以上）



# 図7 朝食欠食の状況



- 菓子、果物、乳製品、し好飲料などの食品のみ食べた場合
- 錠剤・カプセル・顆粒状のビタミン・ミネラル、栄養ドリンク剤のみの場合
- 食事をしなかった場合

資料：国民栄養調査(平成9～14年)、  
国民健康・栄養調査(平成15～21年)

分野:栄養・食生活					
目標項目:1.8 量・質ともに、きちんとした食事をする人の増加					
目標値	策定時のベースライン値 (H8年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)		
成人 70%以上	56.3%	61.0%	65.7%		
			コメント		
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○増加している。</p>				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。	A-2			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載					
(5)その他コメント					

分野:栄養・食生活			
目標項目:1.9 外食や食品を購入する時に栄養成分表示を参考にする人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
男性(20~69歳) 30%以上(策定時には目標値なし)	20. 1%	18. 0%	23. 9%
女性(20~69歳) 55%以上(策定時には目標値なし)	41. 0%	40. 4%	50. 6%
	コメント		
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○男性、女性とも増加している。</p>		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	<p>○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。</p>		A-2
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	<p>○栄養成分表示は、食事内容や量の調整に活用できることから、栄養成分表示の義務化といった環境整備を促す制度の見直しも必要である。</p>		
(5)その他コメント			

分野:栄養・食生活			
目標項目:1.10 自分の適正体重を維持することのできる食事量を理解している人の増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H8年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
成人男性 80%以上	65.6%	69.1%	75.6%
成人女性 80%以上	73.0%	75.0%	78.7%
<p>コメント</p> <p>(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析</p> <p>(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上で課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。</p> <p>(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。</p> <p>(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載</p> <p>(5)その他コメント</p>			
<p>○男性、女性とも増加している。</p> <p>○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。</p>			
<p>A-2</p>			

分野:栄養・食生活					
目標項目:1.11 自分の食生活に問題があると思う人のうち、食生活の改善意欲のある人の増加					
目標値	策定時のベースライン値 (H8年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)		
成人男性 80%以上	55.6%	59.1%	58.8%		
成人女性 80%以上	67.7%	67.3%	69.5%		
	コメント				
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○男性、女性ともに横ばいである。</p>				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○変わらない。	B			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載					
(5)その他コメント	<p>○食生活の改善を特に考えていない人の割合が最も多い年代は、ベースライン値では男性の30歳代(29.4%)、女性の40歳代(20.0%)であり、直近値では男性の40歳代(21.9%)、女性の20歳代(17.4%)である。</p>				

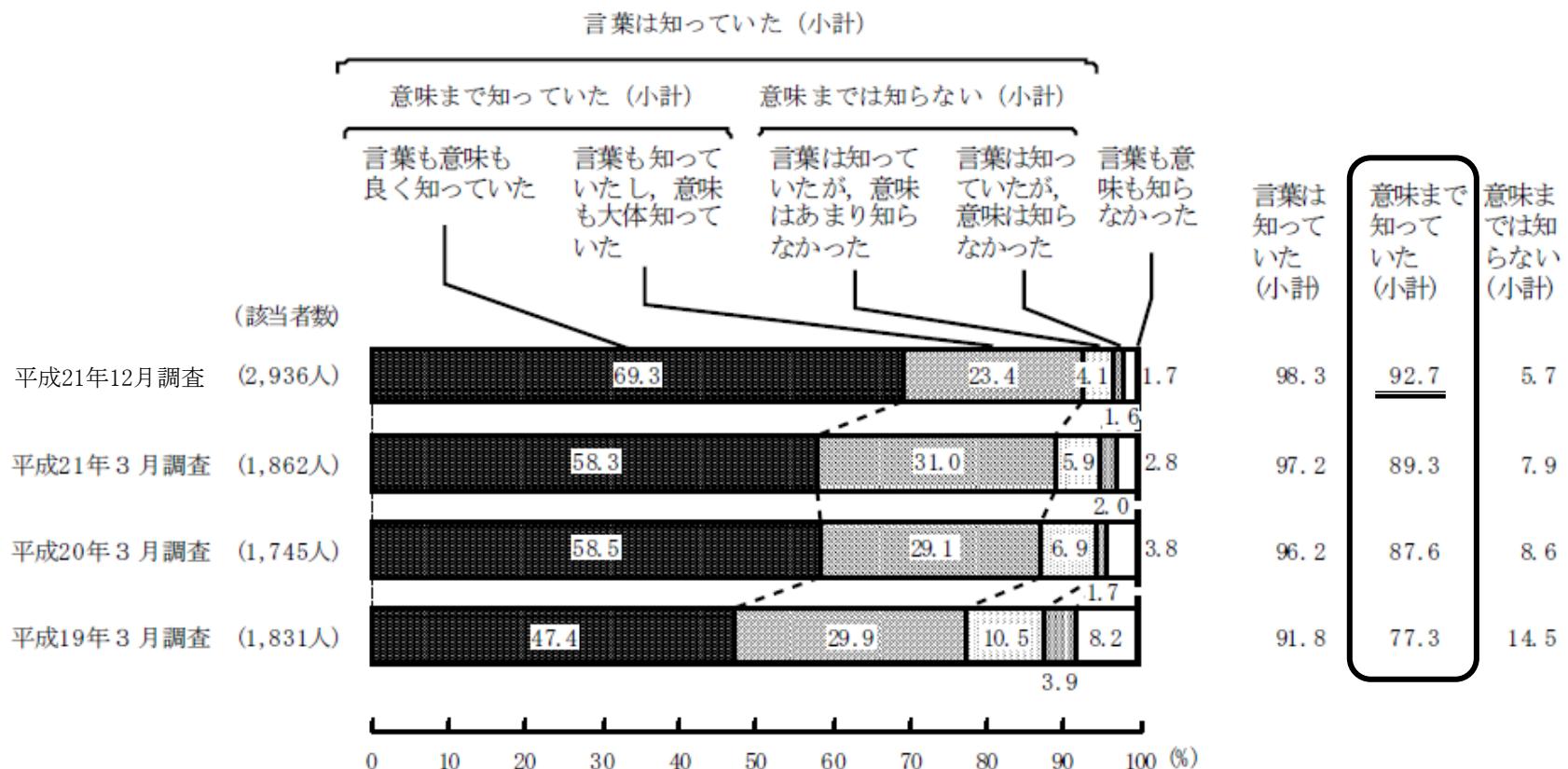
分野:栄養・食生活					
目標項目:1.12 ヘルシーメニューの提供の増加と利用の促進					
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)		
男性(20歳～59歳) 50%以上(策定時には目標値なし)	34.4%	34.5%	38.8%		
女性(20歳～59歳) 50%以上(策定時には目標値なし)	43.0%	53.0%	61.9%		
	コメント				
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○男性、女性ともに増加している。</p>				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。	A-2			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載					
(5)その他コメント					

分野:栄養・食生活			
目標項目:1.13 学習の場の増加と参加の促進			
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
男性(20歳以上) 10%以上(策定時には目標値なし)	6.1%	7.4%	8.3%
女性(20歳以上) 30%以上(策定時には目標値なし)	14.7%	15.3%	16.1%
	コメント		
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○男性は増加しているが、女性は横ばいである。</p>		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	<p>○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。</p>		A-2
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント			

分野:栄養・食生活			
目標項目:1.14 学習や活動の自主グループの増加			
目標値	策定時のベースライン値 (H12年国民栄養調査)	中間評価 (H16年国民健康・栄養調査)	直近の実績値 (H21年国民健康・栄養調査)
男性(20歳以上) 5%以上(策定時には目標値なし)	2.4%	3.5%	3.9%
女性(20歳以上) 15%以上(策定時には目標値なし)	7.8%	7.4%	8.4%
	コメント		
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析 <input checked="" type="radio"/> 男性、女性とも改善している。		
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上で課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。			
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	<input checked="" type="radio"/> 目標に向けて改善したが、目標値には達していない。		A-2
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載			
(5)その他コメント	<input checked="" type="radio"/> 食育の推進に関わる自主グループであるボランティアの数は、平成18年度の28万人から平成21年度は34.5万人と23%増加している(内閣府食育推進室調べ)。		

分野:栄養・食生活					
目標項目:1.15 メタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)を認知している国民の割合の増加					
目標値	策定時のベースライン値	中間評価	直近の実績値 (平成21年食育の現状と意識に関する世論調査 (内閣府))		
成人 80%以上(中間評価時に追加)	—	—	92.7%		
			コメント		
(1)直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	<p>経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴(性、年齢、項目別の分類など)を踏まえた分析</p> <p>○平成18年度の77.3%から平成21年度は92.7%と15.4%増加している(図8)。</p>				
(2)データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題(調査手段、方法、分析材料等)がある場合、記載。					
(3)最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標値に達した。	A-1			
(4)今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載					
(5)その他コメント	<p>○第2次食育推進基本計画において、「メタボリックシンドロームの予防や改善のための適切な食事、運動等を継続的に実践している国民の割合の増加」が目標として追加された(現状値:41.5% → 目標値:50%以上)。</p>				

## 図8 メタボリックシンドロームの認知度



資料:食育の現状と意識に関する調査(内閣府)